

鳥料理

A PARODY

堀辰雄

青空文庫

前口上

昔タルティーニと云う作曲家が

Trillo del Diavoloと云うソナータを

夢の中で作曲したと云う話は

大層有名な話である故、ゆえ

読者諸君も大方御存知だろうが、

一 ちよつと 寸私てもとの手許にある音楽辞典から引用してみると、

何でもタルティーニは或ある晩の事、

自分の靈魂を悪魔に売った夢を見たそうなの。

その時悪魔がヴァイオリンを手にとつて

いとも巧に弹奏し出したのは

到底彼の企て及ばざりし奇くしき一曲。

「余は前後を忘れて驚嘆したり。

余の呼吸は奪われたり。

しかして余は夢より目覚めぬ。

余は余のヴァイオリンを取り出いでて

余が聞きたる音調をそれに止め置とどかんと試みたり。

されどそは遂つひに効を奏さざりき。

その時余が作りたる楽曲、すなわ即ち Trillo del Diavoloは

余が夢中聞きたるものと比較せば、

その及ばざること甚だ遠し。^{はなは}」

これは晩年大作曲家自らが

彼の友人の天文学者ラランドに洩^もらした感慨だそうな。

さて、左様なタルテイーニが感慨はさることながら、

微々たる群小詩人の一人に過ぎぬ私も

夢の中で二三の詩の構想を得たばかりに、

何んとかしてそれに形体を与えようと随分苦しみ躓^{もが}いたもの
だ。

しかし夢中ではあんなに蠱惑^{こわく}的に見えた物語の筋も、

目覚めてみれば既にその破片しか残つてはおらず、

何度^{なんど}私はそれ等の破片を、朝毎^{ごと}に

海岸に打ち揚げられる漂流物のように

唯手^{ただ}を拱^{こまね}いて悲しげに眺^{なが}めたことか。

「ああ、夢の中の詩人の何んと幸福なことよ。

ああ、それに比べて現実を前にした詩人の何んと惨^{みじ}めなことよ。」

そんな溜^{ため}息^{いき}を洩^{ゆる}らしながら昨夜^{ゆうべ}も私は寢床^{ねど}に這^{はい}入^いった。

実は雑誌記者が夕方私の所にやって来て

どうしても明日までに原稿を書いて貰^{もら}わねば困ると云うのである。

私は徹夜をしてもきつと間に合わせると約束をして其^そ奴^{いつ}を撃退してやったが、

それからすぐ睡ねむくなつて、「これあ不可いかん。こうして居るよりか、ひとつ夢でも見て詩の良導體になつてやろう。」
 そう考えながら寢床に這入り、私はそのまま他愛もなく眠つてしまつた。

それから何やらごたごたと沢山夢は見たけれど、今朝目を覚ましたら皆忘れていた。

勝手にしやがれ、と私は糞くそどきよう度胸を据えて
 ブラック・コオフィイ

黒 珈 琲 を飲みかけようとした途端とたんに、こんな事を思
 いついた。

「己おれの書こうと思つている夢のコントの中では魔法使いの婆
 さんが

鳥の骨ばかりになった奴にソオスをぶっかけて

そいつを己に食わせやあがったが、

あれはあれでちよつと乙おつな味がしたぞ。

己もひとつその流儀で行こうかしらん。

己のやくざな夢の残骸ざんがいにウオタアマン・インクをぶっかけ

てやったら、

何とかそれなりに恰好かっこうがつくかも知れぬ。

よし、それで行こう……」

1 奇妙な店

私の見る夢には大概色彩がある。そういう夢を見るのは神経衰弱のせいだと教えてくれる人が居る。そんなことはどうだっていい。唯、^{ただ}私の見る色彩のある夢にも二種あることを私は云つておきたい。その一つは、鮮明な、すき透る^{とお}ような色彩からのみ成っている。その色はちよつとドロツプスのそれに似ている。(私は一ぺん糖分が夢にはよく利^きくといふのでドロツプスをどつきり頬^ほ張り^{おぼ}ながら寝たことがあるが、その朝、私はそのドロツプスにそっくりな色の着いた夢を見たつけ……) そう、そう、それから私がマリイ・ロオランサンの絵に夢中になつていたのもあの絵の色が私の夢のそれに似ていたからであつた。が、もう一方の夢は、そんな鮮明な色は無い。何とも云えず物^{もの}凄^{すげ}いような色で一様に

塗り潰つぶされているばかりである。しかし、そんな色は殆ど現実の中には見出みいだされないようだから、無色と云つてもいいかも知れない。しかし所謂いわゆる無色なのではない。私はたった一ぺんきりそれを見て「ああこの色だ」と思ったものがある。それは仏蘭西フランスの「ESPRIT NOUVEAU」という美術雑誌に数年前載っていたピカソの Nature Morte の絵だ。まあ、あれがちよつと私のそんな夢の色に似ていた。

私が真先に書こうと思っている「奇妙な店」の方は、その第一の種類に属している。鮮あざやかな色の着いている方だ。そうしてその夢の冒頭は、私のそういう種類の夢の中にそれまでにも屢しばしば々現われて来たことのある、一つの場合から始まる。その私のよく

夢に見る場面というのは、ただ一本の緑色をした樹木から成り立っている。その緑色の葉が何とも云えずに綺麗きれいなのだ。そしてそれをじつと見つめていられない程それが眩まぶしいのだ。しかしそんなに眩まぶしいのはその緑色の葉のせいばかりではないかも知れない。その緑の茂みの上に一面に硫黄いおうのような色をした斑はん点てんのようなものが無数にちらついているのだ。それはなんだかそんな黄色をした無数の小さな蝶ちようむらが簇むらがりながら飛んでいるようにも見える。それはまたその木にそんな色をした無数の小さな花が咲いていてそれが微風に揺られながら太陽に反射しているのかとも思える。なんだか私にはよく分らないけれども私はそれにうっとり見入っている。——この何んの木だか分らないが、いつも同じ木は、

私の夢の中に、そう——少くとももう七遍ぐらいは出て来ている。だからそう珍らしくはない筈だが、それでも不思議に私はその度たびごと毎に、いつも最初にそれを見た時のような驚きをもって、わくわくしながらそれに見入るのだ。

突然、夢の場面が一変する。——が、それは場面が連続的に移動するのではない。それは不連続的に移動する。つまり、二つの場面の間にはぽかんと大きな間かんげき隙が出来てしまっている。目が覚めてから、夢がどうも辻つじつま褻せが合わなく見えるのは、その間隙の所せ為が多い。私はその間隙を何かで充じゅうてん填しようとして努力してみることがあるが、どうもそれがうまく行かない。私は此こ処こでもそれをその間隙のままにしておくよりしかたがない。(唯、こう

いう具合にだけは二つの場面は連続している。私はその何んの木かを驚きながら見入っている。しかし見入っているうちに、何時の間にか私には今しがたまで確かにそんな木を見ていたのだが、と云う感じだけがして来るようになる。その時はもう既にその木は夢から消え去っている。そしてその残像だけを自分の頭に浮べながら、私はいつか次の場面に立会っている。まあ、そう云う具合にである。）

向うの町角の方が急に騒がしくなる

なんだか人が大勢集っている

私は見上げていた木の傍そばを離れてそっちの方へ何時の間にか

歩き出している

何か珍しい行列が向うの町から徐かにやって来るらしい

あんまり皆が夢中になって見ているので私も人々のうしろから背伸びをして見ている

とうとうその行列が近づいて来たようだ

象だ！ 象だ！ 象だ！ 大きな象が

たった一人で、無頓着むとんじやくそうに、のそりのそりと鼻をふりながら歩いて来る

象の皮膚はなんだか横文字の新聞を丸めたのをもう一度引き伸ばして

貼はりつけたように、皺しわだらけで、くしゃくしゃになっている

その背中には真紅な毛氈もうせんが掛つている、そうして尚なおよく見ると

その毛氈の上には小さな香炉こうろのようなものが載さつていてそれから一すじ細ぼそと白い烟けむりが立ち昇つている

何かの広告であるらしいがそれが誰にも分らないらしい

隣りの人に聞いてもそれは分らないのが当り前だと云うような顔をしている

しかしその香炉の烟りは好いに匂におがする 何ともかとも云いようのないほど好い匂におがする

象ぞうが何処どこかへ行つてしまつても何時までもその匂におだけが残つている

（そうしてその象の残像と、その勻とだけが私のなかに残つて

いつか次の場面になってしまっている）

私の向うに温室のようなものが見え出す

それはすっかりガラス張りだ

私がそれを見て温室かしらと思つたのはそのガラス越しに

見知らない熱帯植物のような鉢植はちうえがいくつも室内に置かれ

てあるのを見たからだ

しかしそれは普通の温室ではないらしい

中にはマホガニテエブル製の小さな卓が五つ六つ一種風致のある乱

雑さで配置されている

そしてその上に一つずつその熱帯植物のようなものが飾られてあるに過ぎない

何処かにこんな奇妙な コオフィイてん 珈琲店があつたような気もされてくる

しかしその中には誰もいない 全く からっぽ 空虚だ

ちよつと這入はいつて見てそれが何だか確かめてみたい

そんな処ところに勝手に這入り込んでいて叱しかられたら

ままよ、それまでだ……と思つて私は おくびよう 臆病な探偵のよう

にこわごわその中に忍び込む

私がガラス戸を押し開けるや否や、ぷんと好い匂がする

それがさつき象のさせていた好い勻とそっくりだ

さつきの勻が私の鼻に蘇よみがえつて来たのではないかと思えた位

何ともかとも云いようのないほど好い勻だ

矢張り誰もいない 私はこわごわ一つの卓テエブルの傍に腰を下ろし

ながら

その勻を捜す……私はそのとき始めて

熱帯植物の鉢植のかげに一つの灰皿があつて

それに烟草たばこの吸殻のようなものが一つ置き忘られてあるのに

気がつく

それから一すじの白い烟りが細ぼそと立ち昇っているのである

どうやらそれから私をすっかり魅している匂が発せられているらしい

私はまた象のことを思い浮べる

そして漸つといまあの象が阿片あへんの広告であつたことに気がつき出す

「ははあ、それだから誰にも分らなかつたんだな

なあんだ此処ここは阿片窟あへんくつなのか……」

私はあらためて店の中を見まわしてみる

やっぱり誰もいない 空虚だ

いかにも静かだ ひっそりしている

それでいてつい今しがたまで客が何組かあつたのだが

それが皆立ち去ったすぐ跡だと云うような気がされる

店の空気がひどく疲れを帯びているのが感ぜられる

誰もいないのに人氣が漂っている　それが鬼氣のようにぞつと感ぜられる

何かしら惨劇のあつた跡の静けさはこんなものじゃないかしらと思えてくる

もしかしたら今まで此処で客同志の間に殺人事件なんかあつて

その跡始末のために皆ここの店のものまで残らず出かけて行つていて

それでこんな空からっぽ虚ぼなのかも知れん……

そう思つて店のなかを見廻すと、一向それらしい形跡はない椅子やテエブルもちやんとした位置にある 鉢植も倒れていない

それでいてどう云うものかそれ等の置き方に妙な不自然さがあるのだ

あちこちへ投げ飛ばされたり、倒されたりしたのをいかにも急いでいそ

元のままに直して取り繕つたような不自然さがあるのだ

——そんなことを空想しながら、私はぼんやり頬杖ほおづえをついて

今にも燃えきつて無くなりそうな灰皿の吸殻を見つめている

それから発せられている匂は私の空想を大いに刺戟しげきしている
「おれは遅参者だ……一足遅れたばかりに、きつとおれを喜
ばせたに相違ない、何かの惨事に立会い損そこなった不運者だ」
そこでもって私の夢のフィルムがぴんと切れてしまう……

それで私は読者諸君にも、ただこんな風に

「まだその顰しかめ面つらをしている

今起ったばかりの惨事の古代的な静けさ」を
お目にかけるよりしかたがないのだ

2 鳥料理

こんなことを書いている分には、頭はすこしも疲れないが、ずんずんひとりで先きへ行つてしまう私の言葉に遅れまいとしてせつせとペンを動かしている私の手が痛くて閉口だ。其処そこでいま、ちよつとペンを置いて、葡萄酒ぶどうしゅを一杯ひっかけ、Westminsterを二三本吹かしたところだ。—— Westminsterと云えば、こんなにおいな勻になど比較にならん位、いましがた私の書いたばかりの夢のなかの勻は好い勻だったし、これから私の書こうとする夢のなかで私の飲んだ葡萄酒（？）は、こんなトリエスト産の葡萄酒よりもずっと上等な味だった。どうやら夢の中の方が私はずっとましな暮らしをしていると見える。……さて、これから私の書こうとす

る夢は、私の夢のなかの第二の種類だ。この夢は、唯^{ただ}、単調だが底の知れないような、深味のある色（甚^{はなは}だ不完全な言い方だがそれはピカソの或る絵のような色なのだ）で塗り潰^{つぶ}されていると思つていて頂きたい。

私はこの夢のことを久しく忘れていたが、去年の冬、神戸へ行つて Hotel Essoyan という露^ロ西^シア^ア人の経営している怪しげなホテルに泊つた時、ひよつくりそれを思い出した。私がそのホテルのことを写生した「旅の絵」という短篇の中にも登場をするが、そのホテルに一人の美しくなったり、醜くなったりする、変な少女がいて、或る晩十二時過ぎに私がそのホテルに帰つて来たら、私の部屋に面している薄暗い廊下のはずれに、そこに二階へ通ずる

階段があるのだが、その階段へ片足をかけながらその少女が寝巻のまま立っていて、部屋へ這入ろうとしかけていた私の方をじつと見ている。……その時突然、この夢が私のうちに蘇ったのだ。私は気味悪くなって、それっきり自分の部屋に這入ってしまったが、その夢の中では私はもつと大胆だった。

その夢というのは、やはりそんなような怪しげなホテルが背景になっている。少女も出てくる。それはしかしもつと可愛らしい少女であった。……とある山の手の町で、私は一人の少女とすれちがいがながら、なんだか私には分らない合図をされた。そんな気がした。そこで私はその少女のあとを追って行った。そうしてその少女が暗い裏通りの怪しげなホテルの中へ這入るのを突き止め

た……

私もちよつと 躊躇ちゆうちよをしたのち、そのホテルの中へはいつ

て行つた

それから少女の昇つて行つたらしい 凸凹でこぼこした階段をこわご

わ昇つて行つた

もう古くなつている階段は一番人に歩かれた真ん中の所だけがすり切れていてとても歩き難にくい

私はそのためそれを昇りきるのにかなり手間てまどつた

漸ようやつと昇りきつてみると薄暗い廊下がいくつかの部屋に通じ

ていたが

その一つのドアが今ばたんと閉しまつてその向うに

人影が消えるのを私は確かに見たような気がした

私はそのドアの前へ立ってノックをした

返事がない 私はもう一度ノックをした

ドアの向う側にやつと足音が近づいてきた そしてそれが一

人の老婆の前に開かれた

かの女は醜悪そのもののような恰かつこう好で私の方を胡散臭うさんくさそ

うに見ている

私は咄嗟とつさに思いついて、鳥料理を食いに来たのだと言った

さつき階段を上るとき、なかば剥はげた壁に「鳥料理……」

(下の字は読めぬ)

という小さな招牌かんばんの出ているのを思い出したのである

それを聞くと、老婆はしぶしぶながら私を部屋の中へ入れてくれた

その部屋の中には古い穴だらけの卓テエプルが一つあるきりだった

私はその前に坐りながら部屋の中を見廻した

さつきの少女の姿は何処どこにも見えない 念のために卓の下を覗のぞいたが矢張り居ない

「確かにこの部屋へ這入った筈はずだが……」と思いながら

向うの低い竈かまどの上に掛けてある大きな鍋なべの中を

何やら厭いやらしく搔かき廻まわしている老婆の後姿を見ているうちに

この婆ばあは魔法使いかも知れんぞと私は疑い出した

何処かへあの可愛らしい少女を隠してしまやがった

ことによるとあの少女を何かに変形させてしまったのかも知れないぞ

としたら一体それはどれかしらん？ と私はきよときよと部屋を見廻している

その時老婆が鍋の中から何やらを皿に移して運んで来た

罎ひびの入った皿の上に鶏の足らしい骨がちよこんと載っているきりだ

「ちえつ、こんなものを食わせやあがるのか？」とぶつちようづ仏頂面らをしてしていると

老婆はにやにや笑いながらソオスのびん壺を持ってきて

それを私の皿にぶっかけるのだ

私はさつき知ったかぶりで此奴こいつを名ざしで這入って来たのだから

否いやでも応でもこいつを食わなければなるまい

私は不承々々そいつを一口頬張ほおぼった 妙な味がする しかし悪くはない味だ

そこでもう一口頬張ろうとした途端に ふと

異形いぎようをして蒸気の立ちのぼっている鍋の傍そばの 棚たなの上に

一個の葡萄酒ぶどうしゆの壇らしいものが置かれてあるのが私の目に入った

今まで空壇あきびんだろう位に思っていたがよく見ると

八分目ほどの葡萄酒らしいものが這入っていてそれがひとりで無気味に揺れている

老婆はそれを気にするようになるときどき変な目つきでそれを見ている

私はまだ何やら鍋の中を掻き廻している彼女に何気なさそうに言った

「婆さん、おれにその葡萄酒を一杯くれ」

すると老婆は解わかつたように私に目で合図をして（何んて厭らしい目つきだろう！）

しかし自分の手許てもとの壇はそのままにして、向うの戸棚へ他の壇を取りに行った

いよいよもってこの壇が怪しいぞ！

この壇がきつとあの少女なのかも知れん？ あの少女がこの壇に這入っている？

そこで私は魔女が向うむきになっている隙を窺^{すきうかが}つて体を伸しその壇をひつたくる　そうして急いでその部屋から逃げ出しかける

惶^{あわ}てて飛んできた魔女が私からその壇を取り戻そうとして

私に武者ぶり着く　私は魔女と格闘をする

そして其奴^{そいつ}をそこに打^ぶつ倒す　しかし其奴は今度は私の足にしがみついて

踏んでも蹴^けつてもそれを離さない

私はとうとう奪い去るのは諦めてあきら

その壇の口を抜き、がぶがぶそれを立飲みし出す

私は見る見るそれを飲み干して行く　それは何ともかんとも
云えないほど好い味がする

おお、私は無類の酒を飲んでいる！　一人の少女を飲んでい
る！

若しも私がああの夜ホテル・エソワイアンの廊下であるの *bizarre*

な少女に出会った時、この夢のなかの私の大胆さの半分でもあつ
たら！……ああ、私は現実では何んと夢のなかでのように大胆に
はなれないのだ。しかし私が我知らずそんなに大胆になれるよう

な機会を与えてくれないのは、ひとつは現実にも責任はある。現実のトリツクは夢のトリツクよりもずっと下手糞だ。へたくそ夢は私のために一人の少女をあつさりと葡萄酒に変えてくれる。それなのに、現実にはホテル・エソワイアンの少女をある或時は私に美しく見せたり、或時はまた醜く見せたりして、そのややっこしいつたらない。そしてあの晩のごときは、ああ、あの少女はまるで魔法使いの婆さんのような顔をして私の前に立っていたっけ！

青空文庫情報

底本：「燃ゆる頬・聖家族」新潮文庫、新潮社

1947（昭和22）年11月30日発行

1970（昭和45）年3月30日26刷改版

1987（昭和62）年10月20日51刷

初出：「行動」

1934（昭和9）年1月号

初収単行本：「物語の女」山本書店

1934（昭和9）年11月20日

※初出情報は、「堀辰雄全集第1巻」筑摩書房、1977（昭和52）

年5月28日、解題による。

入力：kompass

校正：染川隆俊

2004年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鳥料理

A PARODY

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 堀辰雄

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>